

日本作文の会編

日本の 子どもの詩

京都



日本作文の会編

日本の 子どもの詩

京都

岩崎書店

日本文作の会

日本の子どもの詩 26

岩崎書店 昭58

110P 21cm

内容：26 京都

〔分〕911

日本の子どもの詩 26 京都

一九八三年三月二五日 初版発行

編者 日本文作の会

発行者 森山甲雄

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二
電話〇三―八二―九一三一(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ゼンたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもたちの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などもよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくரிだした芸術（現代の子どもの「わらべうた」）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「京都編」であります。どうぞ、ひとつひとつといねいにお読みください。

もくじ



1918
～
1945

8 もず

東西屋

赤リボン

しんこきゅう

9 作業所

水くみ

夜なべ

10 ガラス

工場

オーバ

たき火

11 妹

さるすべりの花

稲こぎ

12 しゃくし菜あらい

稲扱

わらうち

13 米ふみ

14 げきのけいこ

むぎたたき

稲かり

15 岡田君

兵隊

鼻とり

16 稲かり

鯖ずし

17 雲

ツル

シモ

ウシ

18 煙とつ

遠足

アキ

19 キノエダ

リクゲンキネン日

ちょう

つくし

20 田植

田植

におい

21 ねこ

鯉のぼり

22 ずいきの葉

こめあらい

豆



1945

1959

24

まる

なの花

にじ

みずつき

せみのうま

あり

26

ちようちよ

27

子守り

28

つんばらとり

29

うみ

30

ダム工事

31

牛追い

32

雨

33

いねはこび

34

ばら

35

きようどうばきん

36

うさぎ

37

風

38

もみほし

39

ほこのさぎ

32

大根めし

33

兄

34

つらら

35

米ふみ

36

夜があける時

37

お火たき

38

みのむし

39

わらうち

40

雪の朝

41

冬のはま

42

りんご

43

おひなさま

44

レインシューズ

45

停電

46

ふしぎ

47

おすもうさん

48

きものもようの花

49

三人きょうだい

50

しけん

51

ぼくの家

52

わたしの顔

53

「じ」

54

日よう

55

さんばつやさん

56

おとうさん

57

服

82	81	80	79	78		76	75	74	73	72	71
いねはこび	雨	畑おこし おちば	くも あり	たにしの あかちゃん おじいちゃんのおい あさがお		ハトの子	レモン 日本人になりたい	しょうべん とうふ屋さんの笛	家の中 おとうちゃんのおい	つづれ織 足もとをしつかりと	朝
	おとうさんの仕事 七ヵ月おくれた花				1970 ～						

99	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83
おび	桑野・辻崎・山口	お母さん こわさんといて	算数 初雪	今日は足が洗たく機	北山杉 田楽おどり	学芸会 日よりの朝	みち	母と友禅 バレンティンデー	お母さんのはなし	人間 漢字テスト	おねえちゃん おかあさん	しごとのにおい みずえ	中村先生にあげるうた	おばあちゃん	ばんつのはなし 年のくれ

110 107

あとがき——京都府の児童詩指導の歩み
この本の編集をした人たち

105 104 103

山奥の小さな農村
おとな
約束

102 101

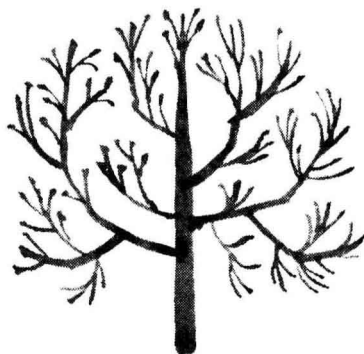
雪道
私が死ぬとき

100

おかあさんの足
沖縄の古い町

*





1918～1945

(大正7年)

(昭和20年)

「童謡」とよばれたころの詩。

白秋によって

「児童自由詩」と名づけられたころの詩。

戦争への暗い道を歩み始めたころの詩。

ここには、京都の子どもたちの「赤い鳥」時代から、敗戦までの詩が、年代順にならんでいる。

もず

辻春吉 小3

赤リボン

徳本忠子 小4

たかい山

青空の下

もずがなく

きりきりとなく

深い空に

愛宕郡大原校

おばさんにいただいた赤リボン
お母さんがしまってる
花見に行くのはいつだろう
早くさしたい赤リボン

上京区乾隆校

東西屋

福永徳次郎 小6

しんこきゆう

前川正八郎 小4

ドンドンチキチン

東西屋

三人ならんで

やって来た

ドンドンチキチン

東西屋

泣いてた子供が

泣きやんだ

上京区西陣校

8

朝起きて

しんこきゆうする、

ながしでしごとをしている

おかあさんの、

頭のあぶらのおい

ちよつとする。

竹野郡網野校(指導)上原清九郎



作業所

岡崎マン 小4

作業所の中、

ほこりいっぱいの中、

米しに来た人が

まごまごしている、

庭の車が

雨にびしょぬれにぬれている。

竹野郡網野校(指導)上原清九郎

水くみ

溝尻英夫 小5

ぎったんぎったん

えをうごかすと

水が勢よくとよに出る。

一ぱいくんで

ぱっとはき出す。

おけの下をもぐって

上へ上がってくる、

あんぶつが

もごもご出てくる、

海がもち上ったようだ。

竹野郡網野校(指導)吉岡醇治

夜なべ

小松サカエ 小5

私が宿題をすまして秋場^{あきば}へ行くと

お母さんが一生懸命に

一たば一たば稲をこいておられる。

ゴーツゴーツと音をたてて

大へん秋場はにぎやかい。

外へ出ると

ひやりと風が通って行った。

トウスを引く音や

稲をこく音が

あちこちで聞こえる。

加佐郡餘内校(指導)川北作一

ガラス

竹内コハル 小3

ガラスに、
人や つくえがうつる。
そのろうかを、人がとおると、
机に、
あたるようにみえる。

船井郡上和知校(指導)塚本傳之助

工場

北村美智子 小5

学校の帰り道、
工場に
たくさん電気
一度にパツとついた。
女工さんの織^おっている糸が
きれいに光って見えた。
工場の音

10

しばらく耳の中をうなっていた。

竹野郡網野校(指導)吉岡醇治

オーバ

太田ふさ江 小5

後に、
いろいろのオーバがかかっている。
あの中にだって、
よいのもわるいのもあるのだ。

右京区御室校(指導)西浦孝一

たき火

和田久子 高1

赤いほのおが
パーツと高く上った。
お風呂場の窓^{まど}がらすにも
ぼんやりうすくうつつた。
寒い寒い冬の朝。

右京区御室校(指導)西浦孝一

妹

米倉美代子 高2

もうねるのだろう、
二階へ上る妹。
あとからついていった。
一人洋服をぬいでいる。
なんだか今日はかわいいよう
おもわず「きせたげよう」といつてしまった。
妹もよろこんであまえる。
妹を床にねさせた。
きがむいたので
お話をしてやった。
妹はよろこんでいきながら
まもなくねてしまった。
妹のねがおを
のぞきこんでいた。



右京区御室校

II

さるすべりの花

坂田ツタ枝 高1

千代子さんのお墓に、
うすもも色の、
さるすべりが咲いた。
やけつくようにあつい日、
道ばたの草は、
よれよれなのに、
さるすべりは生き生き咲いた。
それがなおさら、
千代子さんをおもわせる。

何鹿郡口上林校

稲こぎ

堀内和一 小3

一こぎ、ざくり、
二こぎ、ざくり、
じきの間に稲が一ぱいだ。
じじと

ランプのしんが鳴る。

姉がしんを出す、

あかるくなった。

また、

ざくり、ざくり、

話が一ぱいだ。

愛宕郡松ヶ崎校

しゃくし菜^なあらい

山本久子 小4

堀にしゃくし菜をあらいに出了た。

三日月がてって明かるい。

かごに一ぱいのしゃくし菜を

一つ一つあらいだした。

根の白い方をあらうと、

きいきいと音がする。

すぐたびにはもんがひろがって

月がゆらゆらする。

だれかうしろの方を

自転車にのってかけて行つた。

竹野郡網野校(指導)吉岡醇治

稲^{いね}扱^{こき}

檜原トミ子 小6

向うの山の鉄柱、

大空にとどきそうだ。

細い糸の様な電線、

どこまでも続いて端が見えない。

見えない電線のまだ向う、

太陽が山に入りかかって赤い。

私は稲運びやめて

ほっと息をした。

「もう一寸^{ちよつと}だなあ」と言う父、

稲扱機を踏^ふんでやめない。

相楽郡山田荘校(指導)桑山義治

わらうち

小林 茂 小4

今日は僕、わらうちをしよう。

沢田君も昭二君もわらうちをしとる

わらうちをして

明日はわらうちの詩を書こう。

そして先生をおどろかしてみよう。

それ、わらうちだ。

弟がきて

「兄ちゃん、わらうちか。

お父さんの言いつけでかなんだろう、

わしを叱るからだ」

僕はくやしいが仕方がない。

おばあさんが

「茂、今日はきばって打ったら、

コーヒーをわかせてやろう。

それできばってうて」

僕はいやになったが、

コーヒーが楽しんだ。

一たば 二たばきばってうった。

船井郡上和知校(指導)塚本傳之助



米ふみ

大槻英一 小4

お母さんと米をふむ。

とんとんとんとん米をふむ。

ふむたび 米がぼつぼつ上がる。

ほこりが上がる。

ようやく一うすふめた。

外では鶏がなく。

子供がわいわいさわいである。

僕も遊びに行こうと思った時、

お母さんが、

「もう一升ふんでくれ」といわれた。

いやいやふみかけた。

二うす目もふめた。

さあもう安心だ。大急ぎで外へとび出た。

船井郡上和知校(指導)塚本傳之助

げきのけいこ

竹内章皓 小4

僕はいろりのはたでげきのけいこ。

みんな、あたりながらいっている。

お父さんはまぶしをしながらきいていられる
ときどきふふと笑われる、

一ぺんすませた。

「そんなようけ ようおぼえること」と

おっしゃった。

「おぼえる」といって、

又一生懸命^{いっしょうけんめい}けいこする。

宿題をして晩まで話合った。

船井郡上和知校(指導)塚本傳之助

むぎたたき

大田信一 小4

むぎをたたくと

足やかおにあたる。

あたっても麦たたきはおもしろい。

母は苦しうにぱたりぱたりたたいてい

僕はたたきながら、

こんどこれを詩にかこうと考える。

船井郡上和知校(指導)塚本傳之助

稲かり

大賀義則 小6

ぎいこんぎいこん、

もう稲こきの音が聞えて来る。

鎌^{かま}をとぐと、指がちぎれるようだ。

朝日がさしてきて鎌がピカツと光る。

なんだかうれしくなつて来る。

隣^{となり}りで戸をあける音がした。

向うの道が、

僕達を待っているように思える。

竹野郡網野校(指導)吉岡醇治

